

平井聖監修・浅野伸子・小粥祐子執筆

『よみがえる江戸城』

川村 由紀子

もしかすると今の若い人は「江戸城って何？」ときくかもしれない。もう少し先輩の人は「江戸城って皇居でしょ」と思っているかもしれない。江戸城は徳川幕府の政庁であり、將軍と其の家族の居館であった。明治以降、其の名称を東京城、皇城、皇居と変えて現在に至っているが、石垣や一部の櫓と門を除いて、殆どの建造物が失われてしまっているため、かつての江戸城の姿は今や想像することも難しくなっている。本書は、江戸城即ち徳川將軍の巨大な御殿をビジュアルに再現したものである。

江戸城の建築図面の多くは、東京国立博物館と東京都立中央図書館に残されている。都立中央図書館所蔵の「江戸城造営関係資料（甲良家伝来）」（全八四六点）は国の重要文化財に指定され、特に本丸御殿最後の造営となる万延度の図面は平面図から詳細図に至るまで豊富に残っていて、そっく



2005年9月13日発行
学習研究社
AB判 144頁
定価 2200円＋税

り再現できる程と言われている。しかし、図面資料に書き込まれている仕様等の情報から、実際の建物を思い描くことは簡単なことではない。そこで、CG（コンピューターグラフィックス）やイラストレーションを使って本丸御殿を見せる絵本を、昭和女子大学国際文化研究所のスタッフで作成したのが本書である。

本書を紹介する前に、筆者が勤務する東京都立中央図書館と監修・執筆者の所属する昭和女子大学の関係について触れておきたい。都立中央図書館は、平成四年度、重文「江戸城造営関係資料」（以下「江戸城資料」と称す）の保存対策について調査委託を実施し、平井聖教授（東京工業大学名誉教授）に報告書をまとめていただいた。その指摘に基づき、損傷の甚だしい資料を順次修理してきたが、平成十三年度から十六年度の四年間は国庫補助による修理及び保存対策事業を行い、一〇八点

の資料を修理した。この事業を進めるにあたって連絡会を組織し、平井学長に専門委員を委嘱し随時、専門的立場から助言・指導をいただいた。また、同時に平行して「江戸城資料」の撮影・電子化を進め、この過程においても平井学長・小粥祐子氏の御指導・協力を受けた。平成十七年十一月には修復完了記念として展示会「江戸城を建てる」を江戸東京博物館・東京都公文書館との三館共催、昭和女子大学協力でを行い、浅野伸子氏には多大のご協力を戴いた。本書は同年九月発行で、「江戸城資料」撮影後の画像を多数納め、展示会の解説には、大変参考にさせていただいた。

本書の内容は、CGで見る江戸城探訪、絵図などで見る西之丸・二之丸・紅葉山・吹上、古写真と現状写真で見る江戸城の三部で構成され、巻末に資料編を付している。

〈CGで見る江戸城探訪〉は、NHKエンタープライズ制作のハイビジョンCGの静止画像を考証し、其々に解説を付けている。CG探訪では、本丸への入り口書院門から本丸御殿の玄関前を経て、大広間、能舞台、松之廊下、白書院、竹之廊下、黒書院、中奥、大奥、天守へと進み、バーチャルで江戸城内を訪れる体験ができる。見開き頁の画面をみると、松や鶴が描かれた襖に囲まれた部屋の上部には極彩色の格天井、彫物欄間、屋根

には鍔金具等々、さながら江戸時代にタイムスリップしたかの感に襲われる。次の頁の解説も見開きで、御殿の区域（表・中奥・大奥）や、大広間、白書院等の建物の構成や機能について説明している。また、クローズアップとして、随所に巻物、屏風、障壁画の小下絵等の絵画資料、文献の挿図を入れて補足している。

松之廊下では、次のようになっている。

●CG 金雲が漂う浜辺に松が続ぎ、千鳥が群れ飛ぶのどかで上品な絵様が小壁を含む壁面一杯に描かれ、杉戸は「西王母」が描かれている様子を再現している。

●解説 襖等の絵は弘化度の小下絵（東京国立博物館蔵）によっていること、芝居や絵画で見慣れている太い一本の老松は想像で描かれていたもの、中庭側には明かり障子などの建具がたてられていたこと、本丸御殿内の釘隠し・引手などの鍔金具の図様、彫物欄間の絵様は不明なので、二条城二之丸御殿のものを参考にしたもの、と説明。廊下の構造を説明するため、平面図と断面図（都立中央図書館蔵）を載せている。

●クローズアップ 弘化度の障壁画の小下絵と復元模型（江戸東京博物館蔵）を載せ、長大な廊下に連続して描かれた浜松に千鳥の障壁画がよく分かる。

〈絵図などで見る西之丸・二之丸・紅葉山・吹上〉では、CGではなく、建築図面と写真で西之丸等の区画を紹介している。其々見開き頁に図面と写真を示し、次の頁の解説で小下絵や屏風を示し、歴史的経過、機能、用途等を詳細に説明している。

〈古写真と現状写真で見る江戸城〉では、現在皇居東御苑となっている本丸から二之丸、北之丸を、今見られる景観と明治初期の古写真で比較して紹介している。荒廃した江戸城を撮影した『旧江戸城写真帖』の写真は、静止した時間を切取った迫力がある。

資料編は、江戸城関連年表と城に関する用語解説、参考資料一覧である。

以上見てきたように本書は、江戸城について、どの頁を開いても目で見て分かるように出来ている。その特長をまとめると、

第一に、間口が広く入りやすい。初心者も専門家も、江戸城建造物のビジュアルな情報を得られる。

第二に、絵図、史料・文献で裏づけられている。更に詳しく知りたい人は、挙げられている資料を手がかりに調査できる。「江戸城資料」は、パソコンから都立図書館ホームページの「貴重資料画像データベース」で検索・閲覧していただきたい。

第三に、分かっているところと、想像で描いたところ、分からないことを明記している。ビジュアルに表現したものは、正直なところ、見る人に「本当かな？」と思われ勝ちである。監修者は、襖絵や欄間の彫物、鍔金具で具体的に分かっているところと、想像で描いているところがあることを「はじめに」で断り、気楽に読者がイメージを膨らませてよいと言っている。

第四に、江戸城関係事項が、本書一冊で分かり便利である。城中の儀式と行事、將軍の生活の様子、装束、関連史料、年表、用語解説等、知りたいたことが全て載っている。

この図書をどのように生かすかは貴方次第。江戸時代にタイムスリップして江戸城空間に遊ぶ、テレビなどで見た江戸城の時代考証が正しいか調べ、江戸城について知りたいとき、どのように役立つ間口の広い図書と言えよう。

（かわむら ゆきこ 東京都立中央図書館司書）